

ハリール イブラーヒーム アブドゥル=マジード 米国出身の元キリスト教徒（上）

説明： サウジアラビア王国に旅した際、いかに神は彼を祝福したか。

よりハリール イブラーヒーム アブドゥル=マジード

掲載日時 08 Jun 2015 - 編集日時 08 Jun 2015

カテゴリ： [記事](#) > [新改宗者ムスリムの逸話](#) > [男性](#)

1998年、私は内科医として働いていた父と一緒にサウジアラビア王国での仕事に参加しました。彼はサウジアラビアで、私は米国にいました。その同じ年にサウジアラビアに出張した際、ダーラン市に滞在し、アル=コバールも訪問しました。そこでは多くのことでとても刺激を受けましたが、アザーン（礼拝の呼びかけ）を初めて耳にした時は、私の中の深い部分の何かが呼び覚まされた感じがしました。



辺りの店舗は一斉に閉店したものの、店主たちは扉を施錠せず礼拝へ出かけていて、私は「これは一体どういうことだ？」と疑問に思ったものです。ムスリムたちは礼拝して戻ってくると、一様にリフレッシュした面持ちでした。私はそれを見て考えさせられました。また、サウジでの身元引受人ムハンマド氏に多くの質問をしていると、市内の大モスクへ連れて行ってくれ、私は後方で見学することになりました。緊張はしたものの、私の目と心は大きく開かれました。それまで私の父を含む誰一人として、そこに招待された人はいませんでした。ムハンマド氏は、当時は私自身も気づいていなかった何かを私の中に見出したのかもしれませんが。彼からは、聖クルアーンの英訳本ももらいました。その出張で米国に持ち帰った品物の中でもクルアーンを最も大事なものとして扱いました。残念ながら、当時はそれを本棚に見栄えのする単なる所蔵本の一冊として扱い、読むことはないという大きな過ちを犯してしまったのです。しかし、過去に全く知る機会のなかった土地の鮮明な記憶は残り、私の中に刷り込まれました。

数年後、私は妻と2人の息子という自分の新たな家族を連れて戻ってきました。皆、サウジアラビアでの生活にすぐに溶け込みました。私の生活は仕事、家族そしてエクササイズを中心に回っていました。私が行っていたお祈りといえば、すべて個人的なものであり、多くとも1日1回だけでした。誤解して欲しくはないのですが、当時の私はキリスト教徒で、キリスト教徒であることに多くは求められません。ただ、大半の人よりは色々行いました。私は従業員たちが礼拝の前後で見せる仕事への影響を観察していました。心の底ではアッラーが私へ呼びかけているのを感じていましたが、信仰的なムスリムが沢山いるリヤドの病院のモスクのすぐ横で働いていたにも関わらず、私はそれを無視していました。私は自らのキリスト教的理解を固持し、反抗的とも言えるほど人を寄せ付けませんでした。年月は過ぎ、礼拝への興味は失せ、ただ神との直接的な絆をまれに保っていただけでした。やがてサウジアラビアでの滞在は2001年に終わり、私の家族は米国のフロリダ州に帰国することになりました。

米国にいた際、私の家族は教会に通い出しましたが、私自身はもう同じ人物ではありま

せんでした。三位一体の概念を理解しようと必死に試みたものの、他人に対する「証人」となるほどまでには受け入れることができなくなっていました。何かがおかしかったのですが、具体的に何かがおかしいのかは分かりませんでした。よって、私は神に直接語りかけました。かれご自身がすべてを創造したのですから、なぜ誰か他の人物を通してかれへ祈りを届けてもらわなければならないのでしょうか？ 当時、私の人生には罪が重くのしかかっていたように思っていました。それは私自身によるものと、現在の私にとっての元妻からもたらされたものです。私は人生の中で最も意気消沈する時期にありました。私が通っていた地獄への道は広く容易なもので、天国への道は狭く渡るのが困難なものです。正直言うと、私は地獄へ向かっていたのではなく、地上の地獄に生きていました。私は常に祈りによって物事のバランスを取り、ときおり嫌々教会に1時間ほど出席したものでした。この状態は、ここアル=コバールにある病院の任務を引き受けることになるまで、数年間続きました。

去年は、アル=コバールにやって来る以前の数年間の悪い状態が一因となり、23年間続いた婚姻関係が終焉したことにより、涙と悲しみに満ちた年でした。あれ程までに落ち込むことになるとは思いもよりませんでした。神はすべてを持ち去り、私をそれ以上はない底辺に連れて行きました。私の周辺にいる人は、私がいつも沈痛な面持ちで、私の人生も空っぽであることを知っていましたが、日に日に状態は向上してはいました。私は日課の朝のお祈りを欠かさず行い、頻繁にバイブルを、時に一度に数冊を読み通しました。職場での個人的な生活も向上しつつあり、それは離婚手続きで米国に戻らなくてはならなかった期間でも同様でした。米国から戻って来てしばらくすると、私の上司の一人がイスラームについての情報誌をくれ、私は歓迎したものの、それを読むどころか目もくれず、それは引き出しの中に直行しました。それにも関わらず、上司と私の周辺の同僚たちは私から私自身も気づいていなかった何かを見出していました。あるとき、スタッフの一人が私にお祈り用の数珠をくれました。私はそれを毎日右ポケットの中に入れ、右手でそれを一日中何度も何度も数えていました。それを指で転がしていると、最も困難なミーティングでも冷静さを保ち続けることができずして、人生は一進一退の状態が続いていましたが、生活と仕事は続けました。そして去年の11月、私は離婚裁判と家族の訪問で米国に一時帰国しました。良い時も悪い時もありましたが、故郷の心地よさのようなものは全く感じられませんでしたし、教会にも足を運ぶことはありませんでした。

12月の始めにサウジに戻ってきた時、私は落ち着くことができずして、決断を下すのが困難だったため、それを下せずにいました。それゆえ、私は自分の心と精神に耳を傾け、リラックスすることを心がけていました。何日にも渡り、多くの人々は私が何かを心に奪われていたかと思っていたらしく、私が何を考えているのか不思議がっていましたが、私は身を軽くしようと無駄なものを一層ずつ切り捨てたり、何が返ってくるかは未知数だったものの、質問やメッセージを繰り返し送ったりしてしていました。病院ではモスクの近くまで行ってアザーンを聞いたり人々が入り出するのを眺めていました。彼らはそこに立って周りの世界に無頓着に会話にいそしんでいましたが、彼らがそこに入る前と後では明らかに様子が異なりました。私はそこに惹き付けられましたが、同時にそれを拒否しました。こちらの道からあちらの道への溝は、渡り切るには幅が広すぎ、それをどうやればいいのか見当もつきませんでした。そして私は物思いに耽りました。

ハリール イブラーヒーム アブドゥル=マジード 米国出身の元キリスト教徒（下）

説明： 彼がサウジアラビアでいかにイスラームについての読書をし、改宗に至ったかについて。

よりハリール イブラーヒーム アブドゥル=マジード

掲載日時 08 Jun 2015 - 編集日時 08 Jun 2015

カテゴリ： [記事](#) > [新改宗者ムスリムの逸話](#) > [男性](#)

1月の始め、私はクルアーンを所有したいという、どうしようもない程の欲求に駆られました。それは、私の「やることリスト」の最優先事項の一つで、頭の片隅に常にありました。その2日後、木曜日の午後に仕事から帰宅した私は昼寝をし、目覚まし時計はセットしなかったものの、礼拝後の開店時間になるとクルアーンの翻訳本を買いに出かけることを決意していました。午後の礼拝のアザーンがけたたましく鳴り始めると私は揺さぶり起こされましたが、疲れていた私は自分にこう言いました。「もうちょっと寝て、クルアーンは後で買いに行くことにしよう。どっちみちそれは必要なものではないだろう？」頭の中でこれが聞こえると、私はベッドから飛び出して服を着替えました。私の髪は寝癖で滅茶苦茶だったので、野球帽をかぶりしました。タクシーを呼び止めた私は、ムスリムになりたい旨を運転手に伝えました。彼はその決意を歓迎し、私たちはジャリール ブックストアへと向かいました。道の途中では酷い渋滞に巻き込まれ、ようやく到着したのは良かったものの、あたかもアル=コバールの人口の半数近くがそこへ入ろうとしていたかのように混み合っていました。私は書籍セクションへの階段を急いで駆け上り、必死に探し始めました。そこは大量の本と人でごった返していました。どこにあるのか分からなかったため、私はようやく店員をつかまえ、クルアーンの置かれているセクションを教えてもらいました。彼にそれが売り切れということをご報告されると、私はついカッとなり怒鳴りつけてしまいました。「そんなことがあり得るのかい？ ここはイスラームの中心地、サウジアラビアなんだぞ？ 君はクルアーンの英訳がここにはないと言っているのか？」失望した私は、わくわくしながら待っているタクシーの運転手の元に手ぶらで帰ってきました。私たちはどちらもがっかりし、別の書店を探し始めましたが、職場の病院の付近にもジャリール ブックストアがあったのを思い出し、そこへ直行しました。そこに到着したのは夜の礼拝の時間になってからでした。運転手は付近のモスクへ礼拝へ行き、私は他の非ムスリムがするように店舗の外で礼拝後に開店するまで待っていました。やがて開店すると、私は他の誰よりも早く店員に詰め寄り、無事にクルアーンの本を購入することに成功しました。そこではセール価格からさらに割引さえしてくれました。ひょっとすると彼も私の中に何かを見出したのかも知れません。例のタクシー運転手は私たちがあきらめなかったこと、そして私が欲しかったものを入手したことに満足気でした。

誰にも勘付かれることのないよう、クルアーンの訳本を読み始めました。読めば読む程、質問が浮かび上がってきましたが、自分が何をしているのか（つまりイスラームを徐々に受け入れていること）がばれてしまうのを恐れて誰にも聞けずにいました。真理の探求を阻むのは、仕事の時間だけだったという期間もありました。何日もかけてクルアーンを読み解き、バイブルからも答えを探し出そうとしていました。私の調査はイエス（彼に平安あれ）にまつわることを中心としたものでした。彼は実際、どういった人物だったのでしょうか？ 彼は本当に神だったのか、また三位一体の一つだったのでしょうか？ 私はすでに唯一神を信

じていたため、この疑問には苦悩しました。キリスト教徒として、その神がアッラーなのかどうか疑問に思っていました。唯一なる神しか存在しないことは、ムスリムの友人たちや職員たちが皆、唯一神は他ならぬアッラーであるという事実を証言していたように、私にとっても明白でした。私は真剣に過去の信仰について疑問を抱くようになりました。その段階では、まだムスリムになる用意はできていませんでした。しばらく経ったある日、私がお祈り用の数珠をポケットの中ではなく手に持って上司の部屋に入ったところ、彼はこう言いました。「まるで君はムスリムのようなだよ、マイケル！ ひょっとして改宗でも考えているのかい？」彼は半分冗談で、そして半分真面目に言いました。私は彼の机の前に腰を下ろし、「実はそうなんです。」と言いました。それは強烈な瞬間であり、おそらく私たちは2人も、その朝のことを忘れることはないでしょう。彼は机の側から私に近づき、私の手を握りしめ、私の改宗を助けるためなら何でもするよと言ってくれました。私は感謝し、その申し出を受け入れ、彼による指導を求め、彼は合意しました。私は実に幸せいっぱい、それからより真理の探求に力を注ぐようになりました。私はクルアーンとバイブルを読み始めました。ある深夜、私はクルアーンの最後の数ページに目を通していました。そこに「バイブルとクルアーンにおけるイエスとムハンマド（彼らに平安あれ）：イエスが神の僕であり、神格性を有してはいないことを指し示すバイブルの典拠」と銘打たれセクションを見つけました。私はそれらの10ページをゆっくりと慎重に読み進め、幾度か読み返してみました。「イエスは神ではない」などあり得ることなのではないでしょうか。私はマタイ、ヨハネ、マルコの福音書をそれぞれ読みました。バイブルに目をやり、その著者について、そして新約聖書の赤い字で書かれた部分をイエスが実際に述べたのかということについて調べてみました。私は、1970年代から80年代にかけて、何人もの宗教学者たちがバイブルを2回改訂したものの、イエスが実際にバイブルの中で著した言葉は一言もないということを見ました。書かれていることは全て、彼の地上における偉大なる人生が終わりを迎えた大分後になってからのことなのです。私はクルアーンに戻って読書続けると、そこには明確に、アッラーがイエスを創造し、マリアが処女であったことが記述されていました。神はただ「有れ」と言うだけで、彼の存在はもたらされたのです。彼は、人々に正しい道を説くためにアッラーによって遣わされたムスリムだったのです。また、彼は決して死んだのではなく、現在は天国におり、やがてアッラーの御意どおりに再び地上に戻り、世界を統治すると述べられています。また私の研究からは、アッラーがその教えをクルアーンとして預言者ムハンマドに啓示し、それが筆写家により書き記され、ムハンマド自身によって確認作業が行われたことが分かりました。私の心の目は完全に見開かれました。唯一神の概念はそこにあり、アッラー以外に崇拝される権利はなく、ムハンマドはアッラーの使徒であるという事実疑問はなくなりました。なぜキリスト教徒たちはあれ程までに取り違えてしまったのでしょうか。3つは1つではなく、唯一絶対であり、かれこそはアッラーなのです。イエスが神であるという信仰に問題を抱えていたのは無理もないことだったのです。ただ単に、彼は神ではなかったのです！ もちろん、彼は神の使徒という重要な存在ではあるものの、神ご自身ではないのです。

私はこのことが自分の心の中にあることを認知すると、直ちにイスラームを受け入れました。その瞬間、私はかれに従属的となりました。そして改宗するには誰と会えば良いのかとおおっぴらに聞くようになりました。そして私はある宗教者を紹介されました。そうなる、私は大股で闊歩しながら、それまでに感じたこともなかったような上気分になりました。私は尊敬されている宗教者と会い、長い話し合いの末に信仰証言をしました。彼は私を抱擁し、もうあなたはイスラームを受け入れたムスリムだよと言ってくれました。私たちは抱擁を交わし、私は泣きそうになりました。その夜、私はコンパウンドのモスクで最初の礼拝をしました。私はとても多くの人々からの抱擁を受けました。翌日、私はイマームと会い、彼

のオフィスで再度信仰証言をしました。彼は私に正午の礼拝にも来るよう言い、私はそうしました。そのとき彼はその場にいた全員に私を紹介し、私に前に来るよう求めました。彼は私に何か言うことはあるかと聞いてきました。私は再度彼らの前で信仰証言をし、軽く自己紹介と改宗の経緯を述べました。それが終わると、モスクの中の全員が私のもとにきて握手と抱擁をしました。それまで、一度もあのような愛情と思いやりに満ちた歓迎をされたことはありませんでした。私は涙しました。ムスリムになった後は、適切な礼拝方法を先生に教えてもらいました。今ではすべての礼拝を時間内に行い、30冊の本と冊子、そして2000ページ分のイスラームに関する電子書籍を読みました。

私は両親、息子、兄弟に電話して、自分の信仰の詳細を話し、彼らにはその事実を温かく受け入れてもらうことができました。

私は現在、自分の名前をマイケル アレン ウイルソンから、ハリール イブラーヒーム アブドゥル=マジードに法的に変更する手続きの途中です。

私は耳を傾けてくれる人たち全員に、自分の知る真理について話し続けています。

私はこれまで、ムスリムやキリスト教徒たちから幾度となく、なぜムスリムになったかを聞かれました。私はただ、アッラーがかれの預言者ムハンマドに、アッラーのみを崇拜し、アッラーの御意にかなう人生を生き、それが現世と来世で成功する唯一の道であるという啓示を下したということを知ったため、天国で至福の生活という報奨を受けるためそうしたのだということしかできません。今の私は満たされており、幸福です。

アッラーに称えあれ。

この記事のウェブアドレス：

<http://www.islamreligion.com/jp/articles/2258/viewall/>

Copyright © 2006-2015 www.IslamReligion.com. All rights reserved.